

共同研究プロジェクト「ペルシア語文化圏の歴史と社会」2009年度第3回

「南アジアから見たペルシア語文化圏」

日時：2010年2月13日(土) 14時～18時

場所：AA研マルチメディア会議室 (304)

内容：

- (1) 「ペルシア語によるサンスクリット翻訳文献—歴史叙事詩『Rājatarāṅgiṅī』を中心に」
小倉智史 (京都大学大学院)
- (2) 「インドにおけるペルシア語文化とインド・イスラームの形成」二宮文子氏 (AA 研共同
研究員、京都大学文学部)

報告の要旨

(1) 小倉智史

「ペルシア語によるサンスクリット翻訳文献—歴史叙事詩『Rājatarāṅgiṅī』を中心に—」

ペルシア語文化圏において南アジアは、少数のムスリムと大多数の非ムスリムという人口構成が近現代まで継続したこと、ムスリムが進出する以前より非ムスリムによって高度な知的体系、文化が形成され、膨大な数のサンスクリット作品が編纂された点で特異な地域と言える。南アジアに支配層として定着したムスリムは時にサンスクリット文献を翻訳し、非ムスリムの知的体系を受容していった。しかしサンスクリットのペルシア語翻訳文献を本格的に扱った研究は世界的にも未だ稀である。本報告では数あるペルシア語によるサンスクリット翻訳文献の中で、カシミールでカルハナ他何人かのバラモンによって編纂されていったサンスクリット史書『ラージャタランギニー』のペルシア語訳を取り上げた。

最初に南アジアのムスリム諸政権におけるサンスクリット文献の翻訳活動を紹介した。はじめトゥグルク朝のフィールーズ・シャー (r. 1351-1388) の宮廷、カシミールのシャー・ミール朝第8代スルタン、ザイヌルアービディーン (r. 1420-1470) の宮廷における翻訳活動を紹介し、次いでムガル朝の宮廷翻訳局での活動を、当時翻訳活動に携わっていたムスリム知識人であるアブドゥルカーディル・バダーウニーの回想録を典拠として検討した。宮廷翻訳局での翻訳作業は解説者と翻訳者の共同作業で行われた。また解説にはブラフマン、あるいはブラフマンからの改宗者が当たり、翻訳にはムスリムの宮廷官僚が当たった。

次に原典である『ラージャタランギニー』について若干の説明をした上で、そのペルシア語訳について検討した。諸史料の情報を検討したところ、『ラージャタランギニー』のペルシア語訳はアクバルの治世 (1556-1605) とジャハーンギールの治世 (1605-1627) に二度編纂されているという推測が成り立った。更にアクバルの治世に編纂されたものは、はじめムハンマド・シャーハーバーディーという人物がペルシア語訳を作成し、その後バダーウニーがそれをもとに抄訳を作成している。

その上で現在までに発見されているペルシア語訳の写本を検討した。四写本のうちロン

ドンにある二写本は、本文中にあるカルハナの暦年計算を検算している記述からシャーハーバーディーの手による 1589 年作成のヴァージョンと確定できた。またミュンヘンにある一写本がジャハーンギールの治世に編纂されたものと比定した。

そしてこのペルシア語訳がムガル朝期のペルシア語年代記にどのような影響を与えたのかを検討した。『集史』インド史の巻をはじめとする『ラージャタランギー』ペルシア語訳編纂以前に成立したペルシア語年代記と、以後に成立した年代記とのカシミール史の情報を比較してみると、後者の情報は前者に比べて格段に精度が向上している。また個々の記事を検討すると、このペルシア語訳が『アクバル史話』や『アクバル会典』といったムガル朝期のペルシア語年代記に参照されていたことが分かる。

本発表ではカルハナの『ラージャタランギー』冒頭 100 シュローカとペルシア語訳の該当箇所をそれぞれ日本語に訳出し、内容を比較する作業も行った。それによりシャーハーバーディーが原典の内容に対して客観的、批判的な叙述態度をとっていること、ムスリムの歴史との比較検討を試みる意志があったことが明らかとなった。

今後はサンスクリット原典とペルシア語訳全文の比較はもとより『バガヴァッド・ギーター』や『ヨーガヴァースィシュタ』といった同時代に編纂された翻訳作品との比較、そして後代のペルシア語文献への情報の伝承経路などを検討していく必要がある。

(小倉智史)

(2) 二宮文子「インドにおけるペルシア語文化とインド・イスラームの形成」

本報告では、中世北インドで著されたペルシア語の神秘主義作品の写本・内容分析に基づき、インド・イスラーム文化の形成や伝播について考察を加えた。

本報告が前提とするインド・イスラームは、「インドでムスリム（と自称する人々）が実践するイスラーム（と称されるもの）」と定義づけられ、インドのムスリムが著した正統的クルアーン注釈から、ヨーガの要素を取り入れた混交的なスーフィズムの修行法までを含む。今回はその中でも、インド的要素との混交の度合いが強いと見なされる神秘主義文献に注目した。最初に、先行研究が扱ったインドの神秘主義の例を用いて、インド・イスラーム文化の形成モデルを2つ作成し、インド・イスラームの混交文化のあり方を説明した。また、ベンガルの神秘主義文献における主要モチーフであり、本発表で扱う文献にも登場する「ムハンマドの光」の説明を行った。次いで、北インドで書かれたペルシア語の神秘主義文献『神秘の鉉脈』の分析に移った。本文献は未だ刊行されておらず、17 点の写本が確認されている。現在までに確認した 5 点から、テキストには 2 系統あることが判明しているが、内容に大差はない。1265 年没の高名なスーフィー、ファリードゥディーンに帰されているが、後世の仮託であろうと考えられる。テキストではまず、クルアーンやハディースを引用して人類の心が「隠された宝の宝庫」であると説明される。次に隠された宝を

顕現させる方法としてズィクルなどの修行法が挙げられ、さらに心に隠された 7 つの宝の詳細な説明がなされる。最後に、神による世界創造からアダム創造、天国からの追放までの物語が、人類の心が存在するようになった経緯として語られる。この世界創造において重要な位置を占めるのが、世界に先立って創造され、それから世界が発生したとされる「ムハンマドの光」である。このモチーフは、13 世紀にナジュムッディーン・ラーズィーによって著された『僕たちの大道』に由来するものと考えられる。しかし、『神秘の鉦脈』では、「ムハンマドの光」がより擬人化され、神との関係における情感の変遷といった物語的要素が加わって全体として長くなっているといった独自の発展が見られる。『神秘の鉦脈』の写本は、東はコルカタから、西はラーワルピンディー、カラーチーまでの間に分布している。写筆年代とテキスト系統の分析からは、この文献が東から西に、200 年ほどかけて伝えられていったという経緯が推定される。ただし、現在得られているデータは限定されたものであり、この推定はあくまで試行的なものである。今後さらに調査を進め、この推定を検証していく必要がある。

(二宮文子)